

月報

34号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 曦 編集★飛田 雄一
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1
メゾンド青丘ビル2階
TEL (078) 734-5989

新しい出発に寄せて

姜 在 彦

中国東北地方の大学や研究機関に在職している幾人かの研究者とは文通もあり、論文や著書の寄贈もうけている。しかし、その地を訪問し、じかに彼らと接する機会を持つことができなかった。

さいきんも吉林省長春市にある東北師範大学日本研究所の南昌龍教授から手紙をいただいた。その文面の中には社会科学学院のある教授を通じて『朝鮮民族運動史研究』創刊号をみる機会をもったが、「創刊に寄せて」の趣旨に全的に賛同するというくだりがあった。

ことほどさように『朝鮮民族運動史研究』は、われわれが予想もしなかった世界を駆けめぐっていて、研究会の動向とその成果が注目されていることを、改めて思い知らされた。同時にこの研究会のユニークさが、まさに南北対立の中でいちじるしく歪められている「三・一運動後の民族運動史研究に重点を置く」、それにある

ことも自負してよいと思う。もちろんかたくなに、それだけをやれというわけではないが、やはりどこに「重点」を置くかという初心に帰ることだけは、つねに念頭におくべきだと思う。

私は『月報』一七号（一九八六年六月一日）の「研究会発足五周年にあたって」のなかで、「私の研究会運営において、精神的にも、研究的にもマンネリズムにおちいるのではないか」という危惧をのべ、「近いうちに誰か研究会の運営を担当して、最近やや沈滞気味の研究会に、新進気鋭の気風を吹き込んでくれることを切望」しておいた。

幸いにしてこの四月から、研究会運営の責任を水野氏が、機関誌出版の責任を堀内氏がそれぞれ担当されて、新しい出発をすることになった。研究会および機関誌の内容に新しい刷新があることを期待してやまない。とりわけ研究会のメンバーの中には、さいきん海外旅行をするばかりが多く、機関誌には従来のような論文一辺倒ではなく、紀行文その他の史論も是非いれるようにしてほしいものである。

追悼・金慶浩先生

さる四月二十五日朝、長年青丘文庫の事務員として「在日」および「民族」研究会の世話を下さっていた金慶浩さんが亡くなられた。肝臓癌だというが、あまりにも急な死であった。三月の「在日」の例会の時には、あんなに元気に見えたのに。一九八四年三月の「在日」の例会で、在日一世からの聞き取りとして金さんからこれまでの歩みを聞いた。以下はその記録である。この記録をこのような形でまとめなければならなかったのは、非常に残念である。(堀内)

金慶浩さんは、一九二〇年一〇月慶尚南道蔚山で生まれた。八才で中南公立普通学校に入学したが、ちょうど今の総連で生徒を募集するように先生が村々を回って募集したという。年齢はバラバラで、子供のいる小学生もいたそうだ。先生は日本人、朝鮮人合わせて一四、五人で、生徒は約二百人。朝鮮語は週に一、二回程度であったが、四年になると朝鮮語の使用が厳しくなり、朝鮮語を使うたびにクラス委員が帳面につけ、一回につき五銭の罰金を払わなければならなかった。ちなみに月謝は、50銭であった。光州学生運動の時上級生から学校には登校するなといわれたこと、朴鍾基先生が近くの山へ生徒を連れて行き、唯物論的な話をされたことなどが、思い出として残っている。

るという。

普通学校卒業後、鶴城にある蔚山農業実習学校に入学、そこで三年間勉強したのち、面書記の見習いを一年ほど務めた。苗代、綿花、桑の木などの指導がそこでの仕事であった。たとえ田植は、日本式の正条植えの指導などをしたが、いやになつてやめ、家の仕事を手伝ったり、家を出てぶらぶらしたりしていたという。

一九四〇年満二〇歳になったときに日本からの労働募集に応募して、その年の三月日本に渡った。行き先は福岡県天道鉾山。二〇人くらいのグループの班長として朝夕の点呼、病人の報告、手紙の代筆などの世話をし、二年間まじめに働き貯金もした。抜け出したい一心からであった。休日一人で外出できるようになって、ここを抜け出し姫路に行った。当時姫路には、おじさんの従兄弟が飯場を開いていて、そこで帳面つけなどの仕事をしたという。

そのころ、四人くらいの友人ができ、歴史研究会をつくった。指導者は民族主義者で、その影響から民族服を着て町に出かけたこともあった。しかし長くは続かず、半年ほどでカフェ遊びに狂い、おじさんに怒られたという。二四歳の頃であった。その後東京に行って半年ほど砂糖工場で働き、再び姫路に戻り飯場に入り、さらに飯場の移転とともに呉の飛行場に行った。また半年ほどで姫路に戻り加西へ行き、川西飛行場で働いている。

とき解放を迎えた。

解放後、帰国のため飾磨の港に行くが、当分船は出ないという事で荷物だけ置いて加西へ戻った。ちょうどその頃から加西でも、帰国準備の一環として夜学が始まり、その先生をすることになった。当時の夜学は方条、中野、笠原、野条の四ヶ所で、李相舜氏が笠原、金慶浩さんは野条の責任者であった。数カ月後、すなわち一九四六年の二、三月ごろ夜間から昼間に切り替えられ、生徒は多くなったが経費はかさむようになったという。

一九四六年三月朝連姫路分会加西支部が結成され、それにもない四ヶ所にあった学校が統合されて東笠原朝鮮人小学校になった。校長は朝連の分会長でもある姜福守氏で、李、金さんら四人で学校を運営した。初婚は二七歳の時というから、この頃であろう。

一年ほどのち、姫路に呼び出され姫路初等学院の先生となる。この学校は、陸軍の兵舎の跡を借りてやっていた。その間、朝連の指導で朝鮮高等学院で講習を受け、三カ月間マルクス主義理論をみっちり勉強したという。当時の食べ物は、塩に味噌が少しの味噌汁、いものおかゆなどで、昼はこっぺパンだったそうだ。

(3) 講習の後姫路に戻り、民青結成の準備委員として働く。初代委員長として金東煥氏を選び学校へ戻った。ちょうどその時阪

神教育闘争が起こり、教育を守る立場から連日ビラまきをした。湊川公園での大会に参加しようとして姫路から出てきたところ、兵庫駅でつかまった。生田署で日本警察と米軍の取調べで殴られ、三日間ぐらいい口が腫れて開けることができなかったという。二週間ほどのちに釈放され、学校に戻った。

朝連が解体され民戦ができた。このとき相生小学校船坂分校に転動した。責任者は曹永祥氏であった。そこで祖防委の闘争を見て幻滅したという。子供たちを闘争の道具としか考えておらず、強制的に組織にしたがわせようとするやり方に反対し、曹氏と対立した。それがもとで査問にかけられ、一週間ほど毎晩苦しめられたという。耐えきれず広島へ逃げ、一年ほど飯場生活を送り、さらに神戸の吉田町で本田組の飯場で働いた。

一九五七年頃、再婚して神戸の東出町に所帯を持っていたとき、隣の人から「成人学校をしてほしい」と頼まれ、二年ほど続ける。その間に、李相舜氏、金東煥氏が訪ねてきて、総連が結成されたことを聞き、また、学校に戻ってくるよう誘われもした。さらに、東神戸支部委員長の金成武氏の勧誘を受けて、六〇年四月から雲内にあった東神戸初等学校に入った。ちょうど学校建設運動の時の二年間を過ごし、現在の校舎が落成する直前の六二年三月、西宮朝鮮初級学校に教務主任として転動した。西宮時代に、肺病にかかる。さらに二年後の六四年宝塚小学校に転動、その年の七月大阪で集中指導が行われ一カ月ほ

『4.24阪神教育肉手-民族教育を守った人々の記録』(フレコモニターより1988年4月)

教師、父兄、生徒が一つになって



金慶浩(キム・ギョンホ)

六十七歳

神戸市須磨区在住

川西飛行場の土木工事の飯場で帳付け係をしていたときに解放を迎える。当時、朝連西脇、姫路学院の教員を勤める。

そのころ、私は加西^{かさい}に住んでいました。国に帰るつもりで荷物などは先に送りましたが、節磨^{ふしご}港で一足違いで船に乗り遅れてしまったんです。それで、北条^{きたじょう}で連盟の書記をしながら、加西初等学院で仲間三人と教師をすることになったんです。

加西にはそれまで四つの学校がありました。公会堂の

一室を借りていた連盟の事務所で朴洛基^{パクラクキ}氏が北条学校を、飯場跡のバラック校舎で曹性鎬^{チョンシホ}氏が中野学校、李相舜^{リサングン}氏が東笠原学校、それと私が野条学校を担当していました。学校といっても夜間学校で、帰国したときのためにウリマルを中心に教えていたんです。その四つの学校が、一九四六年の春に統合されて、加西朝連初等学院になったんです。

私はその後、姫路初等学院に赴任することになったのですが、当時の小学生は年齢もまちまちで、青年もいましたよ。生徒が自分たちで生徒会のようなものをつくり、活発に活動していました。当時のことを、「デモや集会に小学生まで駆りだして」と悪く言う人もいますが、民族教育を守るかどうかの状態であったことを考えに入れなければなりません。

教材は連盟中央から送ってきたものを使っていました。部数の少ないときは、私たちがガリ版で刷って配布したりもしました。

四月二十四日は、私たち教師は学校に残っていました。その翌々日だったか、湊川公園で大会があるというので、そちらのほうに皆で行きました。姫路から行くのに、高



姫路朝鮮小学校第3回卒業記念写真 (1949年3月)
前列1番右が金慶浩氏 姫路朝鮮初級学校沿革誌より

砂駅で乗り換える予定だったのが、高砂駅では電車から降りられないようになっていました。封鎖されていたんですね。そのまま兵庫駅まで直行し、そこで今度は降ろされて、そのまま検挙されたんです。仕の一時ごろだったと思います。ものすごい人数でしたよ。それから、M

Pや警官にトラックに詰めこまれて、生田警察署に連れて行かれたときには、もう夕方になっていました。

「朝鮮学校なんかがあつてええと思っくんか」と言いながら殴ったりけったりして、結局二週間ほど拘留されました。日帝時代には朝鮮を侵略して日本人学校つくっておきながら、独立した在即朝鮮人が学校つくってどこが悪いと主張しましたから、ひどく殴られましたよ。初めのうちは痛かったけれども、そのうち感覚はなくなっていました。ああ、また殴られているんだと思うぐらいのものでした。

確かにいろいろなことがありましたが、当時は自分たちの学校を守るので、私たち教師ばかりか、父兄や生徒がみんな一つになってがんばっていました。みんなが、独立国家の民族としての誇りを持っていたんです。当時、給料なんでものは昼飯一回食べたらなくなる程度のものでしたから、いつも生徒の家を回って食事をさせてもらっていました。朝鮮人どうしの強い連帯があったんです。それで私たちも民族的使命感に燃えて、学校を守っていく一心でやっていけたんです。

(一三頁より)

と厳しい思想点検を受けたのち、また一カ月間近畿学院で本格的に仕上げられたという。

次の年の六五年に問題が起こった。ある日本女性から「教員に雇ってほしい」との電話があり、学校に呼んで話を聞いたところ釜山で韓国人将校と一緒だったという日本人だった。これを校長および支部委員長に報告したところ、「スキがあるからスパイみたいなのが来る」といって、思想点検の総攻撃を受けた。当時金日成の論文が出たりすると、年に一回試験があったが、それを受けていなかったことも攻撃の対象になったという。

いたたまれなくなって、神戸を離れ愛知の三河半島へ行き半年ほどパチンコ屋に勤める。神戸の戻ると、本部から「西神戸の商工会へ行かないか」との誘いがあって、六六年から二年ぐらい宣伝部長としてそこに勤めた。その後加古川の商工会に回され、高砂の加印支部で西神戸と同じ仕事をした。当時、民団の加印支部の団長と親しくなり、民団の若い連中を商工会に結集させたという。しかし、商工会の仕事をしていたがら総連の仕事に絶えず引っ張り出されることに抗議して支部委員長と対立、結局七〇年頃に加印での仕事もやめてしまう。

その後、宝石の行商を三、四年し、七五年頃には祖国墓参団で韓国を訪問した。そして、八〇年四月から青丘文庫の事務員として働くようになったのである。

第九七回 在日朝鮮人運動史研究会（八八年一月一〇日）

「初期日韓会談と在日朝鮮人の強制送還問題」

飛田 雄一

日韓会談は、一九五一年一〇月より予備会談が始められた。その契機はよく知られているように、GHQが、サンフランシスコ講和条約の発効を前にして日本政府に在日朝鮮人の国籍問題について韓国政府と話し合うように勧告したことによる。以降、一九六五年の日韓条約締結まで、在日朝鮮人の法的地位問題は両国間の主要な議題のひとつであった。

金東祚『回想三〇年・韓日会談』（一九八六年、ソウル）によれば、会談初期の段階で日本政府は、生活保護を引き続き受けようとするものを強制送還する方針であったという。この強制送還問題について、韓国外務部政務局『韓日会談略記』（一九五五年、ソウル）によれば、次のようなジレンマがあったという。即ち、生活保護を受け取らないようにすれば強制送還という問題はなくなるが、そのことは在日朝鮮人の生活権擁護の闘いを続けている「在日共産主義者」たちに韓国政府を誹謗する格好の材料を提供することになるというのである。

現在の在日朝鮮人の強制送還問題の「原点」ともいえるこの時期の日韓会談の論議について、その他の韓国政府側の資料をもとに報告し、その後、討論を行なった。

「一九五二年・大阪多奈川事件」

梁 永厚

朝鮮戦争の最中、「ドブクロ密造」という口実で、在日朝鮮人にたいする弾圧が、各地で行なわれ、マスコミをにぎわした。しかし弾圧の本質は、軍事要塞復活に反対する平和運動の一翼を担っていた在日朝鮮人の勢力を弱め、強制送還をしていくための政治的弾圧であり、日本国民のなかに民族排外意識を煽ることにあったといえる。

朝鮮戦争の特需景気で日本経済が活気を呈していた時期、在日朝鮮人は民族差別のため就労ができず、失業率は日本人のそれに比べ八倍、生活は日本人の生活より、二倍半以上も困窮していた（日赤「在日朝鮮人の生活実態」一九五六年刊）。

当時の在日朝鮮人は、就労できたとしても肉体労働か、低賃金のニコヨンくらいで、職に就けない者は、酒の密造、米の買い出しなどで生存を維持せざるを得なかった。とくに密造酒、米の買い出しは経済事犯として、日本当局の摘発をうけ、いちごっここのようになつていた。生存のために繰り返さざるを得なかったのである。

大阪における密造酒弾圧の最たるものが、一九五二年三月の多奈川事件である。大阪府の最南端に位置する多奈川町、深日町（現在は堺町）には、日中戦争の頃まで地場産業として、瓦の製造があつたが、一九三七年、戦争遂行のために川崎重工の艦船工場が進出し、そこへ大量の朝鮮人強制連行労働者が投入された。

終戦のときに、朝鮮人労働者は一万人にふくれあがつていた。川崎重工からは何んらの保障もつけず、戦後帰国していった。帰るべき朝鮮人八〇〇余人が、朝鮮戦争のころまで住みついたのである。

戦後、地場産業の瓦製造は復興するところとならず川崎重工艦船工場も操業がとまり、この町の住民は、日本人、朝鮮人を問わず、貧困のどん底に追いこまれた。こうしたなかにあつて、海辺の町でもあるので、製塩に目をつけ、それで生活の維持をはかったが、製

塩も専売法に触れ、なお、兵庫県高砂あたりの在来の塩田が復活するのには押されて、すたれていった。塩田から追われた朝鮮人は、密造酒ドブクロ造りで生存を図ろうとした。

朝鮮戦争中、米軍の艦船の寄泊港および修理港として、目をつけた米軍の意を体した日本当局は、この港町から朝鮮人を一掃し、米軍に協力する町に変えようと、ドブクロ造りを口実で大弾圧を行なったのである。

弾圧は、一九五二年三月二六日の未明と、三〇日の未明の二回にわたり、八〇〇人余りが分散居住しているこの町に、四五〇余人の警官を動員して行なわれた。

朝鮮人側は、押収密造酒を積みこむトラックの前に座りこみ、タイヤの空気を抜いたり、密造酒の容器を壊すなどの抵抗をした。しかし、当局のねらいは「朝鮮人を町から出すこと」であつたので、第一回の弾圧後、町の出入を警官が検問する措置をとり、朝鮮人労働者朴燦福に発砲（病院収容後死亡）し、重傷傷者一〇数人、逮捕者二五人という弾圧を加えた。子どもまでいて八〇〇余人のところへ、警官四五〇人による弾圧であつたので、朝鮮人側は大パニックとなつた。当時の朝鮮人団体・在日朝鮮統一民主戦線大阪府委員会は、全大阪的に弾圧反対対策委員会を組織し、「軍事基地深日港の再建に反対する、現地の朝鮮人を強制退去せよとする、陰謀による弾圧である。」と事件の糾弾とパクロを行なった。

亀崎町長は「生活保障のない弾圧は不幸である」と声をあげ、各地の民主勢力からの支援もあつた。

死亡した朴燦福の葬儀（四月九日）には、府下と隣りの和歌山から五〇〇余名が参席し、国家警察泉南地区署へ葬儀デモが行なわれた。

以上、報告（ここに書いてあるのは要旨）のあと、当時の日本の税制は、酒税による収税率が大きかったので、密造酒造りを野放しにはできない、というところからの弾圧ではなかつたのではないが、また、生活権擁護の面からだけでなく、戦後日本の朝鮮人施策とのからみからの分析が必要、米占領軍の基地化政策などと照らしてきちんとした事件評価を残しておく必要性について、アドバイスをうけた。

☆新著図書案内

韓国化粧文化史附韓国 2' 茶文化(茶具)	[全完吉編]	ソウル	悦話堂	B5	229P
賊役実伝(上) 京畿、忠清、全羅道	[車文彦解題]	"	隆江出版社	B5	442P
" (下) 慶尚、黄海、平安道	["]	"	"	B5	934P
朝鮮民政資料叢書	[金善解題]	ソウル	隆江出版社	87. 3月	A5 613P
日帝時代貧民生活史研究	[姜万吉著]	"	創作社	87. 6月	A5 395P
朝鮮西学史研究	[李元淳著]	"	一志社	86.12月	A5 532P
月南 李商在研究 [月南先生銅像建立委員会]	"	路山版		86. 4月	A5 491P
朝鮮被 虜 関係資料集	[李離和編]	"	隆江出版社	85. 3月	A5 516P
韓国歌謡史(1895 ~1945)	[朴海宗著]	東京	晶文社	87. 9月	A5 844P
韓国史研究 57号	[韓国史研究会編]	ソウル	同 会	87. 6月	A5 138P
아시아文化 3号 [아시아文化研究所編]		江 原	翰林大学出版部	87.10月	B5 292P
東洋学 17輯	[東洋学研究所編]	ソウル	檀国大学出版部	87.10月	B5 578P
역사과학 124号	[編集委員会編]	ピョンヤン	社会科学出版社	87. 4月	B5 48P
韓国文化 7輯	[韓国文化研究所編]	ソウル	ソウル大学校同所	86.12月	A5 311P
百済研究 17輯	[梅允遠編]	大 田	忠南大百済研究所	86.12月	B5 345P
朝鮮銀行史	[朝鮮銀行史研究会]	東京	東洋経済新聞社	87.12月	A5 1034P
協和会事業概要	[以庵代筆記]	佐々木行雄講述	1936年以下不詳		

■研究会案内

在日朝鮮人運動史研究会 第101回例会

日 時 1988年 5月 8日(日)午後2時

テーマ 「解放後の尼崎市の在日朝鮮人史」

報告者 梁 泰 昊氏

朝鮮民族運動史研究会 第74回例会

日 時 1988年 5月15日(日)午後3時

テーマ 「1930、31年の間島蜂起と
次の運動との継続性について」

報告者 金森 襄作氏

※ 場所はいずれも青丘文庫にて